第219号

図書室だより

2025/11/5

No.1

目標16：平和と公正をすべての人に
目標10：人や国の不平等をなくそう

ベトナム帰還兵が語るほんとうの戦争

ただ見ているだけで胸が締め付けられるこの写真。皆さんも、きっとどこかで目にしたことがあると思います。米軍の爆撃から避難する母と子の瞬間を澤田教一氏(1965/9/6)が撮影。翌年にピュリッツァー賞に輝いた報道写真**『安全への逃避』**。戦争の悲惨さ・残酷さをこの一枚の写真が全てを語っていると思うのは私だけでしょうか。

第二次大戦終結からわずか10年後に、勃発したベトナム戦争(1955～1975の20年間)。今年は、**『アジアの小国ベトナム』**が**『大国の米国』**に勝利しベトナム解放50年という節目の年。一言でいうと、米国と南ベトナムが、北ベトナムと南ベトナム解放民族戦線が対立した戦争。で、単に米国と北ベトナムの戦いという簡単な構図ではなく、インドシナ半島の歴史的背景(植民地支配からの解放)、東西陣営の対立(冷戦/社会主義国と資本主義国)等の複雑な事情が絡み合っています。本号を書くにあたり、歴史資料やWEB検索で知りえたことは、ベトナム全土で、同じ民族同士が北と南に分かれて不毛としか思えない泥沼のような殺戮が繰り返される。が、ジャーナリストの戦場からの報道で米軍による**非戦闘員の大量虐殺(ソンミ村事件)**や**枯葉剤散布(ダイオキシン等)**など非人道的な戦況の事実が世界を駆け巡り、米国、日本、世界中で反戦運動が生まれた。米国は北ベトナムに250万トンの焼夷弾や爆弾を投下、ちなみに太平洋戦争時の日本への投下爆弾は13万トン。米国側の戦死者・行方不明者170万人、ベトナムの戦死者約300万人、内兵士は約120万人、行方不明者は約20万人。このおぞましい爪痕を残しベトナム戦争は終結。何と人間とは愚か生き物なんでしょうか。

右の写真の方は、アレン・ネルソン氏です。1947年にニューヨーク生まれのアフリカ系アメリカ人。貧困家庭に生まれ、高校中退後は正規の仕事につけず、軍隊に人種差別はないと思い、母親を楽させたいと1965年海兵隊に入隊。沖縄の米軍基地で訓練後ベトナム戦争に従軍。1970年除隊。除隊後、深刻なPTSD(戦争後遺症)に悩まされ、20数年間という長期間に渡る治療で何とか克服。1990年代以降、日米両国を中心に戦争の体験を人々に語る講演を通して、平和の大切さを訴える生涯を送った人物。

講談社

今年度の図書だよりは、**SDGs目標16・平和**をテーマにしており、平和ノーベル賞受賞・原爆関連・アウシュビッツと次号記事のネタを模索中に図書室で「ネルソンさん、あなたは人を殺しましたか？」「その時、赤ん坊が私の手の中に」「母は枯葉剤を浴びた」の3冊を偶然手にしました。夏休み中に読み込みました。とてつもなく重く、しんどい、きつい内容でした。第二次世界大戦については、教科書や映画等でそれなりに情報は得てはいました。が、ベトナム戦争の悲惨さ・残忍さについては初めて知ることばかりでした。日本人が直接参戦した戦いではないからなのか、社会科の教科書に、多くのページがさかれていなかったような気がします。

第219号

図　書　室　だ　よ　り

2025/11 /5

No. 2

アレン・ネルソン氏　わが校にて人権講演会

城東工科高等学校『創立 80 周年記念誌』の 18 ページに 2008/11/25(H20)、2 年 3 年生向けの人権学習講演にて来校との記載がありました。5 時間目 2 年・6 時間目 3 年と体育館で通訳を介して講演されたそうです。この事実を知った時、ぞくっとして鳥肌がたちました。私が生まれたのもこの年です。たまたま手にしたのがネルソン氏の本。偶然かもしれませんが、何か不思議なご縁があるかもと、勝手に思っています(^)o(^)。わが校で当時どのようなお話をされたのかわりません。が、右の著書の冒頭に【初めて広島・長崎の原爆平和資料館に入った時、米国小学校で学んだ原爆授業内容が、米国政府に都合のいい、ウソとデマの宣伝であったということを悟った。平和資料館に立ち、ひとりの人間として、米国人として、いたたまれない思いを抱いた】と。彼はこの 2 冊の著書の中で共通しておっしゃっているのは、戦争とは国際テロそのもの。人を殺すたびに、心の中の大切なものが死んでいくと。両著を読み、私の心をえぐったのは『お前は私の息子じゃない』と帰還した彼に放たれた彼の母の言葉！**戦争が人間性を破壊する**、この一言が全てを物語っていると思いました。彼は、米国は格差社会である。自由と平和と博愛の国、豊かで民主的な国、軍備強大国のイメージがあるのは部分的には事実だが、米国の大都会の『ゲットー』と呼ばれるスラムの貧困は凄まじく、貧富の差は日本人の想像をはるかに超越している。貧しさゆえに軍隊にはいるしかない選択肢。戦場の最前線・激戦地に送られるのは、貧しい庶民だ。恵まれた豊かな家庭の子供は海外留学をし、あるいは有名大学に進学し、親のツテで就職をしている。いずれの国も戦場で殺し合いをするのは貧しい若者達同士である。軍隊の訓練と任務は人殺し。真実をついた、彼の心の叫びが易しい文章ですが赤裸々に綴られており、深く深～く考えさせられた 2 冊です。

残念なことに、わが校に来校した翌年 2009. 3. 26 に戦闘で使われた枯葉剤の影響とされる癌で 61 歳で永眠。
大量に散布された枯葉剤。戦場の悲惨は今も続いており、枯葉剤の被害はベトナム人以外に、韓国軍兵・米国軍兵にも。健康被害は一世代では終わらず孫やひ孫の世代まで影響が・・・・
ダイオキシン汚染は戦争の傷跡のみならず、現代では環境破壊として日本でも決して無関係ではない。

今号で紹介した 3 冊、本校の図書館にあります。

「戦争」は心の傷を連鎖する

戦争は人の命を奪うだけでなく、戦争を生き残った者の心にも深い傷を刻みます。銃撃や爆撃の音、目の前で奪われる尊い命。それらは生き残った者たちの記憶に焼きつき、長く心蝕んでいきます。その心の痛みから戦争の後遺症として DV やアルコール依存症などにも発展するケースは決して少なくなく、その親の背中をみて育った子供にも大きな心の傷を負わせることになります。加害者・被害者関係なく、「人間」は戦争で大きく人間性を揺さぶられ、その中で失われた「安心や信頼」は一朝一夕で取り戻せるものではありません。

だから私たちには「心の傷の連鎖」を止める責任があると思います。戦争の記憶を語り継いだり、被害者・加害者に向き合ったりするその一つひとつが、負の連鎖を断ち切る「小さな一歩」となると私は考えました。

文責：図書部部長 M3－2　N.Y